

NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART



Un peintre solitaire qui aimait Paris

Maurice Utrillo

モーリス・ユトリロ展 パリを愛した孤独な画家

2010年4月17日(土)～7月4日(日)

全作品
日本初公開

モーリス・ユトリロ
《カルボネルの家、トゥルネル河岸》
1920年頃、油彩・厚紙
©Jean Fabris 2010
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

モーリス・ユトリロ(1883～1955年)は、ルノワールやローレックなど、著名な画家のモデルをつとめ、自身も画家として活躍したスュザンヌ・ヴァラドン(1865～1938年)の私生児としてフランス、パリのモンマルトルに生まれました。才能と美貌に恵まれた母ヴァラドンは絵画の制作と恋愛に忙しく、息子モーリスの面倒はもっぱら彼の祖母にまかされていました。母の愛情に飢えていた少年モーリスは寂しさを紛らわすためか、しだいにアルコールに手を出すようになっていきました。そんなユトリロが絵筆を取るようになったきっかけは、アルコール依存症の治療のためでした。本人の意思というよりも、周囲にすすめられて始めた制作活動でしたが、主義や流派

にとらわれず、持って生まれた感性にもとづいて描かれたユトリロの作品は、孤独な内面をそのまま映し出したかのように独特の哀愁と詩情に満ち、今なお多くの人々を魅了していると言えます。

本展はアルコール依存症の治療のために絵画制作をはじめた「モンマニーの時代」の作品、モンマルトルを徘徊しアルコール依存症の治療のため入院を繰り返しながら、ユトリロの代名詞とも言える趣のある白を作り出し数々の傑作を生み出した「白の時代」の作品、さらに名声を得て次第に華やかさを増していく「色彩の時代」の作品を一堂に展示し、ユトリロの画業の変遷を日本初公開作品約90点でご紹介します。

トリック・アートの世界展

— だまされる楽しさ —

2010年7月10日(土)～8月29日(日)

※※※

トリック・アートについて

見る者の目を欺く本格的なトリック・アートの歴史は16世紀ヨーロッパにさかのぼります。

元来、古代やその復興を目指した15世紀ルネサンスから19世紀までの西洋美術そのものが、実物が目の前に存在するかのように再現するイリュージョンの手法を中心に展開しました。ことにルネサンス期の遠近法や明暗法の発達は、描かれた空間や事物の写実性を飛躍的に向上させました。そうした流れの中、極度に迫真的な表現を追求したトロンプ＝ルイユ(だまし絵)が16～17世紀の壁画や静物画で開花したのです。同時期には、遠近法を応用し画面を斜めから見たときだけ何が描かれているか分かるアナモルフォーズ(ひずみ絵)や、画面からの距離によって別のモチーフが見えるダブル・イメージも流行しました。その一方、日本では、江戸時代の浮世絵に一見肖像画のようでいて実は裸体を組み合わせて描いた「寄せ絵」がありました。

美術において人の目を欺くことや欺かれることの楽しみは、近現代にも手法を変え受け継がれます。とくに西洋美術が抽象美術へと大きく舵をきった20世紀には、写真やテクノロジーの発達とあいまって、伝統的なトリックの枠には収まらない多様な視覚的仕掛けを凝らした作品が生まれました。

※※※

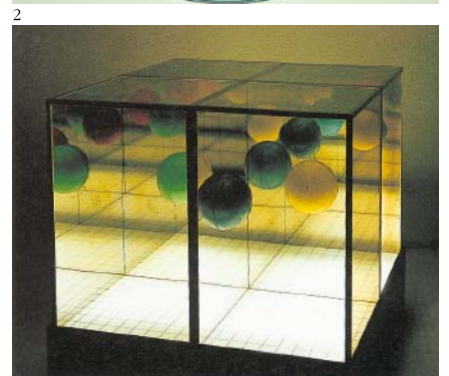
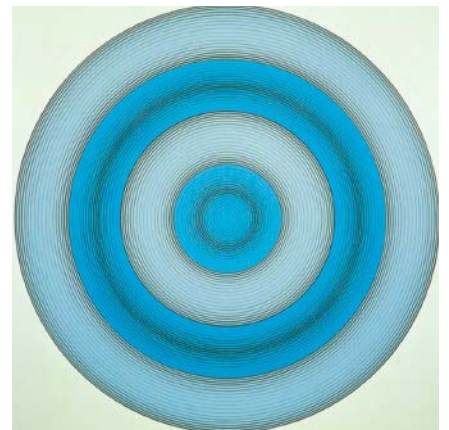
展覧会の構成とみどころ

高松市美術館の現代美術コレクションを中心に展開される本展覧会では、目の機能や先入観による錯覚を引き起こしたり、固定観念を打ち破るトリッキーな戦後美術を、4つの観点から外国作家を含む26名(予定)の作品で構成します。

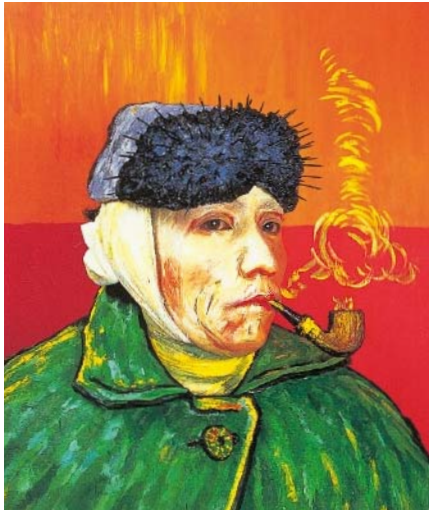
<虚と実をめぐって>では、遠近法による不可思議な空間描写や「のぞきからくり」の立体作品(図1)など、視覚の構造の曖昧さに疑問を投げかけた作品群を紹介。<オプ・アートとライト・アート>では、1960年代に幾何学的パターンと色彩対比によって錯視効果を追求した抽象絵画オプ・アート(図2)や、電光の効果をみせるライト・アート(図3)

を展示します。<スーパー・リアリズム>では、1970年代に写真を利用し克明に描写したスーパー・リアリズム(図4)など、かつてのトロンプ＝ルイユを思わせる作品をはじめ、リアリズムを武器に視覚に揺さぶりをかける作品を集めています。<古典絵画をめぐって>では、1990年代を中心に、名画のイメージに変装した自分を忍び込ませる(図5)など、独自の視点で古典絵画を引用した作品を展示します。

古今東西、人の視覚の能力や構造に挑戦する美術は、美術界の傍流として確かに存在しています。それらは、ときにユーモアに溢れ、見る者の知性と遊び心をくすぐります。近年、伝統的なだまし絵・トリック・アートをテーマにした展覧会が開催されていますが、本展は時代を現代に絞り、日本作家を中心にした戦後美術をトリック・アートという切り口で紹介するユニークな展覧会です。



1 堀内正和《人差し指》1966年、ブロンズ
2 桑山タダスキー《円D138》1966年、油彩・キャンヴァス
3 河口龍夫《無限空間におけるオブジェとイメージの相関関係
又は8色の球体》1968年、石膏・ミラー・ガラス・蛍光灯
4 上田薫《なま玉子J》1978年、油彩・アクリル、キャンヴァス
5 森村泰昌《肖像(ヴァン・ゴッホ)》1985年、カラープリント
※いずれも高松市美術館蔵



1 堀内正和《人差し指》1966年、ブロンズ
2 桑山タダスキー《円D138》1966年、油彩・キャンヴァス
3 河口龍夫《無限空間におけるオブジェとイメージの相関関係
又は8色の球体》1968年、石膏・ミラー・ガラス・蛍光灯
4 上田薫《なま玉子J》1978年、油彩・アクリル、キャンヴァス
5 森村泰昌《肖像(ヴァン・ゴッホ)》1985年、カラープリント
※いずれも高松市美術館蔵

フィレンツェ、美の殿堂より ウフィツィ美術館自画像展 (仮称)

2010年9月11日(土)～11月14日(日)

ここ数年にわたってルネサンス展を開催してきた当館では、今回、その黄金時代を育んだメディチ家の遺産を収蔵するウフィツィ美術館の「自画像コレクション」をご紹介します。このコレクションは15世紀から現代までの名匠をカバーして今なお増え続けており、時代をこえて魅力を保つウフィツィ美術館のなりたちと戦略を反映しています。

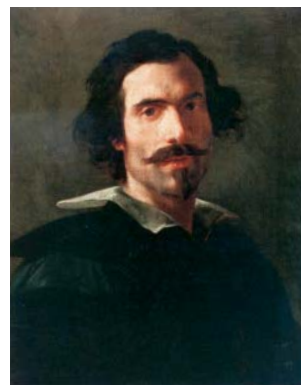
※※※

蒐集の背景—フィレンツェの文化政策

ウフィツィは、中央集権国家の強大化によってフィレンツェが神聖ローマ帝国の傘下に入った16世紀に、2代目トスカーナ大公コジモ1世・デ・メディチ(1519～74年)がとった政策から生み出されました。コジモ1世は都市と一族の輝かしい伝統を生かし、軍事力ではなく文化で存在感を示そうとし

ました。そしてウフィツィ宮の建造を筆頭に市内の美化につとめ、各国の宮廷にフィレンツェ芸術の名声を確立したのです。彼の右腕であったヴァザーリが、ウフィツィの設計者であり、同時にジョットなどフィレンツェに関わる美術家たちを称揚する『美術家列伝』の著者であることも偶然ではありません。

自画像コレクションは、17世紀にコジモ1世の曾孫レオポルド枢機卿(1617～75年)によって創始されました。彼は、自画像に作者のスタイル・美術観・世界観・立場などのすべてが表れると考え、その蒐集がいずれ、実物によるいわば美術家総目録になると自覚していました。レオポルドの甥コジモ3世(1642～1723年)は、蒐集はむろんのこと自画像のサイズの統一などの効果的な展示にも尽力し、その評判が広まると各国宮廷や画家たちも自発的に自画像を寄せるようになり



2

ました。自画像コレクションによって、ウフィツィは全ヨーロッパの美術家の殿堂という地位を獲得したのです。

※※※

16～21世紀の自画像

本展では、約1650点のコレクションから作品状態の良好な16～21世紀の約70点を展示します。バロックの巨匠ベルニーニやレンブラント、フランス王妃アントワネットの肖像を描いたルブラン、みずから作品を持参したシャガール、未来派。西洋美術の教科書をめくるようなラインナップに加え、あの絵の作者はこんな顔なのか…という感慨から、描法の比較、小道具の解説、美術家の自意識の変遷など、いく通りもの見方ができます。そしてなんといっても蒐集者たちの、世界を手中に編纂しようとする情熱と持続力は圧巻です。日本でも国家戦略として文化育成が注目される昨今、大先輩の手腕をかいま見る好機でもあります。



3



1

- 1 エリザベト・ヴィジェール・ブラン 《自画像》 1790年、油彩・キャンヴァス
 - 2 ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ 《自画像》 1635年頃、油彩・キャンヴァス
 - 3 レンブラント・ファン・レイン 《自画像》 1655年頃、油彩・キャンヴァス
- ※いずれも ©Su concessione del Ministero per i Beni e le Attività Culturali

損保ジャパン東郷青児美術館大賞 受賞と記念展覧会 櫃田伸也氏

損保ジャパン東郷青児美術館では「損保ジャパン東郷青児美術館大賞」を設け、優秀な作品を発表した美術家を選出しています。今回の受賞者は櫃田伸也氏です。

櫃田伸也氏は1941年東京都大田区に生まれました。東京藝術大学美術学部大学院修了後、NHK美術部勤務を経て、愛知県立芸術大学、東京藝術大学で教鞭を取られました。国内外の個展やグループ展で作品を発表し、1984年には名古屋市芸術奨励賞を、1985年には安井賞を受賞、近年も制作をつづけ、個展やグループ展で作品

を発表しています。

櫃田氏は身近な風景を幾何学的な線や面で再構築し、遠景と近景、あるいは過去と現在が圧縮された独特の空間を作り出しています。受賞作《不確かな風景》は過去に描かれた二つの作品の各部分を取り出し合体させた作品ですが、心に残る風景の断片を新たに再構成するという「作者の手法の特異さが分かる典型的な作例」として今回の受賞が決定しました。なお、2011年1月には本賞受賞を記念し、受賞作《不確かな風景》を中心に櫃田伸也氏の画業をご紹介する展覧会を開催します。

1977年に創設された損保ジャパン東郷青児美術館大賞は、新人や大家への既存の賞の間隙を埋めるために、実績と将来性を考慮し、「中堅作家」を対象とする賞として設立されました。選考



櫃田伸也《不確かな風景》
1987年／2000年加筆、油彩・キャンヴァス



は美術評論家、美術記者などに推薦を依頼し、その後、推薦された作家の中から財団役員と専門家による選考委員会で選考を行う二段階選抜の方式を取っています。選考には「技術的に優れている」「感覚が新鮮である」「独自の世界をもっている」の3点を審査基準としています。

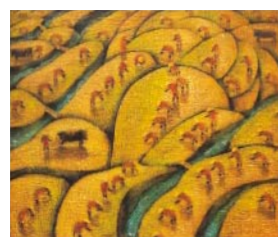
損保ジャパン美術財団選抜奨励展とは

損保ジャパン美術財団は、事業方針の一環である美術家の支援・表彰のため、財団設立の翌1977年に新進作家を対象とする「美術財団奨励賞」を設け、その審査を各公募美術団体に委託してきました。

1981年からは団体の枠をこえた広い視野で自作品をとらえる機会を提供するため、受賞者の作品を展示し優秀作品を表彰する「美術財団奨励賞展」の開催をはじめました。

さらに作家の活動の場が多様化している状況に鑑み、2001年の第20回展からは、団体から選抜された奨励賞受賞作家以外にも出品作家を求める推薦制度を導入しました。財団が委嘱する全国の各推薦委員に前年発表された平面作品1点を募り、奨励賞部門の作品とともに展示する展覧会へと改定、名称も「美術財団選抜奨励展」と変更し現在に至ります。

本展は、新進作家の紹介と育成に貢献する重要な展覧会のひとつとして美術界でも認知され、今後のいっそうの発展が期待されています。



28回展損保ジャパン美術財団選抜奨励展
弓手(ゆんで) 研平《梅雨色田植園(憲法前文三部作その二)》

TOPICS

INFORMATION 2010年4月—2011年3月

2010年4月17日(土)～7月4日(日)

モーリス・ユトリロ展

- ◆月曜休館(5月3日は開館)、午前10時～午後6時まで(金曜日は午後8時まで)
入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般1,000円(800円)／大高生600円(500円)
()内は20名以上の団体料金／シルバー(65歳以上)800円／中学生以下無料

2010年7月10日(土)～8月29日(日)

トリック・アートの世界展 —だまされる楽しさ—

- ◆月曜休館(7月19日は開館)、午前10時～午後6時まで(金曜日は午後8時まで)
入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般1,000円(800円)／大高生600円(500円)
()内は20名以上の団体料金／シルバー(65歳以上)800円／中学生以下無料

2010年9月11日(土)～11月14日(日)

ウフィツィ美術館自画像展(仮称)

【お客様感謝デー無料開館日10月1日(金)】

- ◆月曜休館(9月20日、10月11日は開館)、午前10時～午後6時まで(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般1,000円(800円)／大高生600円(500円)
()内は20名以上の団体料金／シルバー(65歳以上)800円／中学生以下無料

2010年11月20日(土)～12月26日(日)

損保ジャパン東郷青児美術館コレクション 所蔵作品展

- ◆月曜休館、午前10時～午後6時まで
入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般500円(400円)／大高生300円(200円)
()内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

2011年1月8日(土)～2月13日(日)

損保ジャパン東郷青児美術館大賞受賞記念 櫃田伸也展

- ◆月曜休館(1月10日は開館)、午前10時～午後6時まで
入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般500円(400円)／大高生300円(200円)
()内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

2011年2月26日(土)～4月3日(日)

選ばれた新進作家たち

第30回損保ジャパン美術財団選抜奨励展

- ◆月曜休館(3月21日は開館)、午前10時～午後6時まで
入館は閉館の30分前まで
- ◆入館料：一般500円(400円)／大高生300円(200円)
()内は20名以上の団体料金／中学生以下無料

【お知らせ】

★ギャラリートーク、シンポジウム、ワークショップなどの関連企画は、ホームページをご覧ください。

⇒ <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>



NEWS

お問い合わせ先 03(5777)8600
ハローダイヤル

財団法人 損保ジャパン美術財団 損保ジャパン東郷青児美術館
160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階
電話 03(3349)3081 [代表] / ファックス 03(3349)3079
ホームページ = <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>
交通 = JR 新宿駅西口、丸の内線新宿駅・西新宿駅、
大江戸線新宿西口駅より徒歩10分

損保ジャパン東郷青児美術館ニュース No.37
発行日(年1回発行) = 2010年3月19日
発行 = 財団法人損保ジャパン美術財団 大場智行
編集 = 財団法人損保ジャパン美術財団 中島啓子
製作 = 求龍堂
印刷 = 凸版印刷株式会社

100
創設50周年記念事業の一環として